

ART-AID Japan Project for UKRAINE

実施報告書

2022年8月27日
アートエイド実行委員会

趣旨・目的

「ART-AID: Japan Project for Ukraine」は、

1. 展覧会の入場料（500円～）
 2. 作品販売以外のクラウドファンディング特典
 3. 展示作品のクラウドファンディング上での販売
- を通じて、ウクライナ支援の寄付金を募るチャリティアートプロジェクトです。

この企画に賛同したアーティスト、ギャラリー、業者さまたちからの協力を得て、集めた資金を、日本ユニセフ協会の「ウクライナ緊急募金」（<https://www.unicef.or.jp/kinkyu/ukraine/>）に寄付します。

アートエイド実行委員会メンバーは、全員、無償で本プロジェクトに関わっています。

本展示を含めたアートエイドのプロジェクトが、戦災に見舞われた多くのウクライナの子供たちの未来を切り開く機会となりますよう願っています。



プロジェクト概要

- ・プロジェクト期間

2022年3月 – 2022年7月

- ・プロジェクトの趣旨

ART-AID: Japan Project for Ukraineは、アートを紹介し、ウクライナの子供たちの支援を目的とした、チャリティ・アート・プロジェクト。

- ・プロジェクトの2つの目的

①企画展「Dreaming of Life: With Ukraine（生命を夢見て：ウクライナと共に）」の実施
渋谷区松濤のギャラリーTOMにて企画展を実施。会場入り口で募金を募り、その全額を日本ユニセフ協会の「ウクライナ緊急募金」に寄付する。

②クラウドファンディングによる資金調達

今展示にて展示される写真作品の全てを、クラウドファンディングにて先行販売する。

また作品販売以外の特典も販売し、展示開催の実行資金に充て、黒字分を全額寄付に回す。



ギャラリーTOM

アートエイド実行委員会概要

- ・ ボランティアによる組織

当実行委員会の代表であるインディペンデント・キュレーター渡辺真也（テンプル大学美術学部講師）の呼びかけに賛同した方々を中心に組織し、ロシアのウクライナ侵攻発生直後の3月19日に立ち上げた。

実行委員会メンバー全員が、ボランティアとして参加した。



5月12日 展示オープニングでの集合写真

企画概要 1

- ・ 展覧会名

Viktoria Sorochinski “Dreaming of Life: With Ukraine”

ヴィクトリア・ソロチンスキー個展「生命を夢見て：ウクライナと共に」

- ・ 会場：ギャラリーTOM

〒150-0046 東京都渋谷区松濤 2丁目 1 1-1

- ・ 展示期間：2022年5月12日（木）～ 2022年5月29日（日）

- ・ 開場時間：12PM ～ 6PM

※5月27, 28日のラウンドテーブル開催時のみ8PMまで

- ・ 入場料：500円以上
(全額を日本ユニセフ協会の「ウクライナ緊急募金」に寄付)



展示会場の様子

企画概要 2

・ スポンサー

① 企業スポンサー 3社

フレームマン
セルリアンタワー東急ホテル

FLAT LABO



FLAT LABO社による写真出力



フレームマン社によるフレーム作業

② 個人スポンサー 30件

樋口祐貴、畠山直哉、山口桂、Мир в Україні、横沢雄二、昭和女子大学国際学部国際学科、花岡美智子、

松澤久美子、宝仙学園中学校・高等学校、緒方美保、富井玲子、シンヤB、Naoko Lori Murayama、

野々山明子、Yuko Tadano、KIYOSHI SHIOZAWA、ひまわり、大迫佐知子、Alice Mayumi Kitaoka、

筒井慎一、和佳子、優友、智仁、隆太、理紗、伊藤弘美・美知子、Yoshimi Ishida、でぐっち、Itsuko Yasui、
中村洋子、小野智恵、長谷川寿一、池上裕子、坪井みどり、渡伸一郎

・ 協力

ギャラリーTOM、宝仙学園中学校・高等学校、ゲート・インスティテュート東京

Part 1 事前準備

東京での滞在先交渉

ヴィクトリア・ソロチンスキーの約2週間の東京滞在には、ゲーテ・インスティトゥート東京のレジデンスと、セルリアンタワー東急ホテルの2箇所から滞在先の提供を頂いた。

到着後ゲーテ・インスティトゥート東京に滞在し、新作「Life Bearing Land（生命を育む大地）」を制作。

日本政府の水際対策により、海外からの新規入国が制限されており、日本の招聘団体が受け入れ手続きをしビザを取得することが必須であったが、ゲーテ・インスティトゥート東京が今回の企画に協力として入ってくれたことにより、ビザ取得がしやすくなった。

ビザ取得とコロナ対策：コロナ対策を万全にした。しかし、入国のための手続きや、PCRテストの手配、隔離期間の管理などで、かなりの体力と時間、費用を要した。

当初、ホテルやウィークリーマンションを中心に滞在先提供の交渉を進めていったが、コロナ禍での経営不振や、中期滞在ということもあり、交渉は困難だった。アーティスト・イン・レジデンス施設や文化機関などはその活動目的から共感してもらえる部分が多く、上記のように海外からの入国が制限されていた状況もあり、受け入れに対して前向きであった。



ゲーテ・インスティトゥート東京のレジデンス



セルリアンタワー東急ホテルからの眺め

取り組み

オンライン・オフラインで
多角的に広報を実施



美術館やカフェへの
フライヤー配布 (2万枚)



ギャラリーでの
展示ポスター掲示



プレスリリース作成
PR timesや報道関係者への送付



SNS (Instagram・
Twitter) での告知



成果

合計、新聞社6社、テレビ局3社、
Web記事7本での取り上げ



新聞社6社による
合計7本の記事が掲載



テレビ局3社、
通信社1社による報道



ギャラリーでの
取材風景



NPO青山デザイン
フォーラムによる記事

新聞記事

ウクライナ出身アーティストの講演会「生命を夢見て：ウクライナと共に」開催 — 昭和女子大学（朝日新聞 2022年5月9日）

<https://www.asahi.com/and/pressrelease/417983923/>

マリウポリ出身の美術作家が渋谷・松濤でチャリティー展 ロシア軍に「文化も壊されショック」（東京新聞 2022年5月12日）

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/176947>

ウクライナの子ども支援へ写真展 沼津出身の映画監督、東京で開催（静岡新聞 2022.5.17）

<https://www.at-s.com/news/article/shizuoka/1065624.html>

侵攻前の貧村「息吹」鮮明に ウクライナ出身写真家が来日個展（静岡新聞 2022.5.17）

<https://www.at-s.com/news/article/shizuoka/1067358.html>

ウクライナ出身 現代美術作家が個展 渋谷（読売新聞 2022年5月19日）

<https://www.yomiuri.co.jp/local/tokyo23/news/20220518-OYTNT50214/>

写真に残る失われた日常 色のある生活の尊さ（毎日小学生新聞 2022年5月21日）

<https://mainichi.jp/maisho/articles/20220521/kei/00s/00s/017000c>

「美しさ伝えたい」 ウクライナ出身現代美術作家がチャリティー展（産経新聞 2022年5月26日）

<https://www.sankei.com/article/20220526-7UHLMH2ZMJM47IIG2L3ILW6WVE/>

ウクライナの現代美術 反戦の思い込めた展覧会（日本経済新聞 2022年5月27日）

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD143T70U2A510C2000000/>



TV報道・通信社

ウクライナ出身の現代美術作家 ふるさと憂う気持ち語る
(NHK 5月14日)

<https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20220514/1000079881.html>

【インタビュー】ウクライナ現代美術家、
祖国支援のチャリティー展を開催 (時事通信映像センター 5月18日)

<https://www.youtube.com/watch?v=gOfPID0-W8g>

ウクライナ出身の芸術家がチャリティー展 東京・渋谷区のギャラリー
TOMIにて (TOKYO MX TV 5月19日)

「一緒に未来を見ずえて幸せに」ウクライナ出身写真家のチャリティー
展覧会を開催している男性からのメッセージ

(日テレNEWS 2022年5月27日)

<https://news.ntv.co.jp/category/international/9bf5651a602c4f0395f67c1e64ca1960>



Web記事

ウクライナの子どもたちをアートで支援—ウクライナ人現代美術作家ヴィクトリア・ソロチンスキーによるチャリティ展開催
NPO青山デザインフォーラム（2022年05月6日）

<https://www.adfwebmagazine.jp/art/charity-exhibition-dreaming-of-life-with-ukraine-by-ukrainian-artist-viktoria-sorochinski/>

講演会「生命を夢見て：ウクライナと共に」で知る故郷への思い【昭和学報】（2022年6月7日）

<https://univ.swu.ac.jp/topics/2022/06/07/51278/>

ウクライナ出身アーティストによる講演会 昭和女子大学で開催（大学ジャーナル）

<https://univ-journal.jp/157588/>

宝仙学園のブログ記事：

校長blog ジェネレーションXYZ 第25回 「ウクライナ・アーティスト講演会」（2022年5月18日）

<https://www.hosen.ed.jp/sotsugyosei-info/37351/>

校長blog ジェネレーションXYZ 第28回 「ウクライナ講演会のプロデューサーに感謝」（2022年6月6日）

<https://www.hosen.ed.jp/sotsugyosei-info/37668/>

講演会をふりかえる その1（2022年5月27日）

<https://www.hosen.ed.jp/blog-jhs/37433/>

講演会をふりかえる その2（2022年6月1日）

<https://www.hosen.ed.jp/blog-ghs/37571/>



SNS戦略 1

Instagramでは、ウクライナ支援や美術、写真などのアカウントをフォローして、フォローバックを待つ戦略を使用した。その結果、短期間でフォロワー数を伸ばすことに成功し、最終的に136人のフォロワーを獲得することができた。

なお、投稿は出来る限りバイリンガル化することで、日本語を読めない日本在住の外国人でも読めるように工夫した。その結果、英語での投稿を見た外国人が来場するというケースも生まれた。

テンプル大学のInstagramのTakeoverという、大学のインスタアカウントを短時間使用させて頂くという制度を利用して、都内在住の外国人にも積極的にアプローチした。

またクラファンのニュースがあった場合は、そのニュースをInstagram投稿に転用することで、投稿の数を増やすと同時に、メンバーたちの労働時間を有効に活用する工夫をした。

Instagramに投稿した内容をTwitterにも転用したものの、Twitterのフォロワー数を増やすのには苦戦した。最終的なTwitterのフォロワー数は、14人という少数に留まった。



SNS戦略 2

Facebookではイベントページを作り、スタッフの知人を中心にページに招待して拡散を試みた。

『参加する』『興味あり』をクリックした人数は合計40名だった。



内容はInstagramやTwitterとほぼ同じであったが、Facebookはリンクを貼れることと、一度に何枚かの写真が画面に表示される為、より詳細な情報を観られる印象を与える効果と、InstagramやTwitterのフォロワーとはまた違う層へのアピールをすることができた。

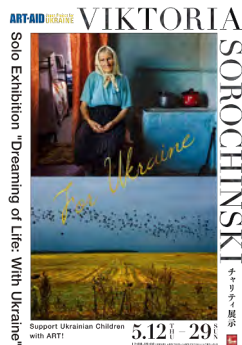
またSNS投稿は、人々がSNSを観る時間と言われる通勤時間や昼休み（7～8時/12～13時/17～18時）にするように試みた。

InstagramとFacebookのストーリー機能を使ってリアルタイムでギャラリーやミーティングの様子等も流し、それを観た人がギャラリーを訪れてくれる事もあった。

広報アイテムなど

ART-AID
Japan Project for
UKRAINE

ロゴデザイン
（前回のロゴを基調に
ウクライナカラーに変更）



ポスターは3枚のみ作成
ギャラリー屋外に張り出し



フライヤー
（QRコードを採用して
クラファンサイトに誘導）



スタンプ H23×W40

前売り券作成用
スタンプ

クラファン特典など



展覧会デジタル
パスポート



展覧会ポストカード（大判・特別仕様）
（スタンプを押したものは前売り券として使用



ステッカー



エコバッグ
（人気特典となった）

クラウドファンディング

・充実した特典

作品販売以外の特典が充実していたため、特典目当てに協力してくれた人たちも多かった。特に相澤事務所デザインによるエコバッグと展覧会ポストカード（大判・特別仕様）の評判が良く、会場で目にした人たちが買い求めるシーンも見受けられた。

・作品販売の成立

展覧会場に展示されている作品の全てを、クラファンにて先行販売した。その価格の中にフレーム代を含めることで、売れば売れるほど、実行資金の負担分が減少する仕組みを作った。

結果として、合計88名からの協力を得て、目標金額としていた250万円を2%上回る、254万5377円を達成することができた。

ウクライナの子供たちをアートで支援しよう
ヴィクトリア・ソロチンスキーチャリティ展「生命を夢見て：ウクライナと共に」開催

東京都 アート

VIKTORIA SOROCHINSKI

Support Ukrainian Children with ART! ART-AID Ukraine Project for UKRAINE



コレクター 88人

現在までに集まった金額 2,545,377円

残り日数 0日

FUNDED

このプロジェクトは、目標金額2,500,000円を達成し、2022年5月20日23:59に終了しました。

シェア ツイート サイトに埋め込み

Solo Exhibition "Dreaming of Life: With Ukraine"

クラウドファンディング

・事前準備の不足

実行委員会の立ち上げからクラファンの開始までの日程が非常にタイトだったため、キャンペーン開始前に事前告知をする時間を取ることができなかった。その結果、クラファンの開始から1週間経っても、10%に満たないという結果になってしまい、実行委員会の内部に焦りが生まれた。

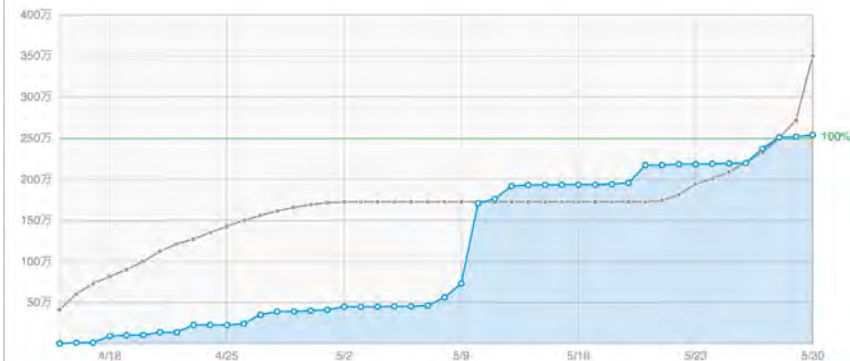
・特典の値段設定の検討不足

ポートフォリオレビューの価格設定（3万円）は、ポートフォリオレビューを求める人たちが学生主体であることを考えた際、高額すぎたため、販売が成立しなかった。もう少し手頃な値段設定にすべきだった。

また展示会場からクラファンへの誘導は困難だったことを付け加えておく。

応援額	コレクター	達成率	終了
2,545,377円	88人	102%	2022年05月30日

ファンディング推移 (現状を把握しつつ、ベンチマークと見比べて今日目指すべき達成率をご確認ください。)



Part 2 展示報告

企画展概要

ヴィクトリア・ソロチンスキー個展「生命を夢見て:ウクライナと共に」

VIKTORIA SOROCHINSKI



Solo Exhibition "Dreaming of Life: With Ukraine"

ヴィクトリア・ソロチンスキーの「Lands of No Return (帰らざる国)」は、彼女の故郷、ウクライナのキエフ周辺に位置する限界集落に住み続ける人たちを、2009年から撮影し続けている写真シリーズです。ソロチンスキーは、ロシアによるウクライナ侵攻の1週間前までキエフの実家に滞在しており、ベルリンのスタジオへと戻ると戦争が始まりました。今もウクライナに家族を残す彼女のチャリティ写真展を日本で開催し、ウクライナの人道支援に貢献します。

出展作品 1

<Lands of No-Return (帰らざる国) (ウクライナ、2009–2018)>

「帰らざる国」(2009-2018)は、残存する古き良きウクライナの村と、そこに住む高齢者を描く長期プロジェクトです。

私はウクライナで生まれ、祖父母はキーウ近郊の小さな村に住んでいました。子供の頃、その場所を訪れたことを覚えています。その記憶は、光と幸福に満ちています。

しかし、何年にも渡る移住を経てからこの村を訪れたとき、その活気のない惨めな様子に愕然としました。そこに残っているのは、ほとんどお年寄りばかりでした。彼らは皆に見放され、伝統や朽ちていく家庭とともに、徐々に消えてゆく最期の日々を過ごしていたのです。

現在のロシア、ウクライナ間の軍事衝突は、これらの人々にさらなる影響を与えるでしょう。なぜなら、彼らは戦争が始まる前でさえ政府に見放され、まともな医療や食料の供給も受けられず、極めて劣悪な環境で暮らしていたからです。この人々や場所は、これからどうなってしまうのでしょうか？

私は10年近くウクライナに通い続け、首都キーウ周辺の様々な村を撮影してきました。私にとって、このシリーズは過去への賛辞です。このプロジェクトは、これらの村のひとつで生まれ、埋葬された私の祖父と曾祖母に直接関係しており、私の作品の中で最も個人的なものです。

個人的な旅として始まったこのプロジェクトですが、取り組んでいくほどに、これらの人々や場所を撮影し、記念することにはより大きな価値があることに気づきました。それらは、かつて魔法のように活気に満ちていた、やがて歴史書の中でのみ知られるようになるであろう文化の、最後の証拠なのです。



出展作品 2

<The Space Between (あいだの空間) (2007-2008)>

どの場所に住んでもつきまとう場違い感や疎外感（何度かの移住のため）が、私自身のアイデンティティを見つけようとする試みを表す、一連の抑圧された空間を作る、主なインスピレーションでした。

ジャック・ラカンが、生涯に通ずる全体性の感覚を満たすことは不可能であると主張したように、この探求には確かに解決の見込みがないのです。すべての子供が母親との連続性と全体性を失うのと同じように、私は祖国との全体性の感覚を失いました。私と祖国のすべてのつながりは、想像上だけのものなのです。現実では、私が何らかの帰属意識を得ようとする試みは、望ましいことではあっても、不可能なことのように見えます。「空間のあいだ」シリーズでは、私の心の中の空間を比喩的に表現したいくつかの部屋を作りました。これらは心理的、象徴的な空間であり、空想という形で私のアイデンティティの様々な側面に触れています。同じ部屋（私のスタジオ）を何度も変えていくことで、私はさまざまな精神状態を経験します。

このシリーズの主題のひとつは自然です。なぜならそれは世界のあらゆる場所を一様にする唯一共通するものだからです。私は人生の全てを都会で過ごしてきたので、自然との関係は決して現実的にはありえませんでした。唯一の自然とのつながりを、私は祖父母が住んでいた森や湖、野原に囲まれたウクライナの小さな村の記憶のなかで見出したのです。そこではすべてが魔法のように美しく、近くて遠い存在のように見えます。この偽物であり、同時に本物でもあるぎこちないつながりは、「空間のあいだ」シリーズで私が探求している主な側面のひとつです。私は、内部空間と外部空間の間の境界線を溶け込ませることにしました。自然の中に行く代わりに、私の構築された世界の中に、自然を取り込んだのです。



出展作品 3

<Far & Familiar (遠くて近いもの) (ウクライナ、2016)>

幼少期の思い出の中でウクライナを考えると、ウクライナの首都キーウの近くにある小さな村で、曾祖母が作っていた物や料理をよく思い浮かべます。祖母の畑で採れた野菜や果物は、とてもリアルで香り豊かでした。エナメルのマグカップからラズベリーを食べたり、新聞紙に包まれたひまわりの種をかじったりしていたのを覚えています。そんな瞬間の写真を見ると、心の奥底で大切にしているさまざまな感情や思い出が浮かんできます。

「遠くて近いもの」は、このような子供時代の思い出と、現在のウクライナの村での生活の様子の観察に基づいた静物画のシリーズです。驚いたことに、移住して何年も経ってからその場所を訪れた時、この30年間で彼らの生活様式が何も変わっていないことに気づいたのです。

もう一つの長期プロジェクト「帰らざる国」(ウクライナ、2009-2018)で古き良きウクライナの村とその高齢者の居住地の最後の残存を撮影しているとき、私は曾祖母と祖父が送っていた暮らしに再び没頭する機会がありました。現代の不穏な現実を描きつつも、一步引いたところから、私の心の中に温かく光に満ちた空間をもたらす物や生活を象徴的に記念するような作品を作りたいかったです。



オープングレセプション 2022年5月12日（木） 6～8 PM

コロナ禍におけるオープングということもあり、オープングイベントは大々的に告知することを避けた。その結果、関係者やスポンサーなどを中心に、およそ50名の来場者があった。またコロナ禍であることを考慮し、飲み物類は一切提供しなかった。

なお、オープングイベントとして、ヴィクトリア・ソロチンスキーによる即興パフォーマンス「Folksong without Language」を開催した。



展示会場でのイベント

・ラウンドテーブル

2022年5月27日（土）、28日（日）6PM – 8PM

参加者：実行委員会メンバーと来場者たち（両日10名ほど）

実行委員会メンバーたちは、それぞれの立場から、今回のプロジェクトに対してどう関わり、どう感じたのかについて、ざっくばらんに対話した。

・シンヤBによるフォトウォーク

2022年5月29日（日）2PM-4PM

写真を撮るのが好きな人がカメラやiPhoneを持って集まって、散歩をしながら写真撮影をするイベント「フォトウォーク」を、テンプル大学アート学科で教壇に立つシンヤBが開催。

テンプル大学からGallery TOM まで散歩をしながら写真を撮影して、SNSなどでシェアした。



昭和女子大学でのトーク

昭和女子大学の学生・教職員やテンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ)の学生、一般の方たち150名以上が参加した。

この企画は昭和女子大学の学生とテンプル大学の学生たちが主導する企画となり、さらに昭和女子大学とテンプル大学の学生が共同で行った初めての企画となった。

メディアの取材も複数入り、充実したイベントとなった。



昭和女子大学 講演会プロジェクト
「生命を夢見て:ウクライナと共に」

講師:ヴィクトリア・ソロチンスキー



Solo Exhibition "Dreaming of Life: With Ukraine"

日時: 令和4年5月13日(金)
講演: 18時10分(60分講演+質疑応答)30分前に開場
場所: 昭和女子大学 8号館 オーロラホール
講演者: ヴィクトリア・ソロチンスキー(ウクライナ出身アーティスト)
テーマ: 故郷ウクライナと写真を用いたアイデンティティ表現について
参加: 参加無料、先着150人
言語: 英語(逐次通訳あり)
問い合わせ: 昭和女子大学 SWU講演会プロジェクト
swukraine@st.swu.ac.jp
主催: 昭和女子大学

講演会予約申し込み

<https://bit.ly/swu0513>



#StandWithUkraine

宝仙学園 中学校・高等学校でのトーク 「ウクライナ：私の祖国、私のインスピレーション」

体育館に集まった上級生と、教室にいる学生さらに父母会の計1,400名以上が視聴。

90分間の通訳は、宝仙学園を卒業した竹村瑠華が一人で担当。

多くの学生や父母たちからフィードバックがあった。

なお宝仙学園は展示の前売り券300枚を購入する形で、クラウドファンディングにも協力して頂いた。結果、多くの学生たちが、同級生や友人、家族を連れて展示を見に来てくれた。



最終結果

- ・ 展示の総来場者数 約700人
(期間2022年5月12日-5月29日 展示オープン日合計：16日)



- ・ 展示会場に設置した**募金箱（入場料収入）**での寄付総額

5月11日(水)	1,000円
5月12日(木)	13,900円
5月13日(金)	5,000円
5月14日(土)	21,000円
5月15日(日)	28,500円
5月17日(火)	18,083円
5月18日(水)	20,000円
5月19日(木)	32,600円
5月20日(金)	17,000円
5月21日(土)	36,000円
5月22日(日)	42,086円
5月24日(火)	17,500円
5月25日(水)	15,700円
5月26日(木)	22,020円
5月27日(金)	45,550円
5月27日(土)	74,550円
5月28日(日)	84,773円

全合計 495,262円（目標金額は40万円）

※全額を日本ユニセフ協会の「ウクライナ緊急募金」へ寄付

クラファンでの総調達額： 254万5377円

手数料（10%）： 25万4538円

消費税： 2万5454円

銀行振込手数料； 540円

実行委員会口座への振込み金額：226万4845円

1. クラファンでの作品販売

作品販売の総額：171万6000円

手数料10% 17万1600円

手数料の消費税10% 1万7160円

作品販売の純利益分：152万7240円

2. クラファンの作品販売以外の売り上げ

作品販売以外の売上総額：82万9377円（254万5377円 - 171万6000円）

手数料10% 8万2938円

手数料の消費税10% 8294円

作品販売以外の売上からの純利益分：73万8145円

展示オペレーションに使える金額の総額：

A: フレーム代金を除いた作品の純売上額の20% = 27万6400円

B: 作品販売以外の売上からの純利益分73万8145円

合計：101万4545円

UNICEFへの寄付の合計金額：

フレーム代金を除いた作品の総売上額の50% 69万1000円

+ 会場の募金箱で集めた全金額 49万5262円

合計：118万6262円

最終結果

・総支出

展示制作費	161,426円
作品制作費	703,325円
輸送・通信費	88,036円
交通費	22,790円
宣伝費	66,981円
雑費	30,499円

総支出合計 1,073,057円



クラファンで集めた展示オペレーション資金の101万4545円を支出が上回ってしまったため、不足金額の58,512円を渡辺真也代表が補填した。

展示の総評 1

・協力者の存在

実行委員会に名前を掲載しなくても良いと言って協力してくれたアートハンドラーたちの存在が大きかった。その結果、写真展には難しい展示空間に、美しい展示を設置することができた。

・遠い国で起こった戦争に想像力をめぐらせる

ウクライナから遠く離れた平和な日本に住む私たちに何ができるのか？という問いから始まったこの企画だが、美術作品を通じてウクライナの生活文化を身近に感じられる機会を提供できた。

・金銭とは異なる文化的意義

ロシアのウクライナ侵攻に反応する形で作られた実行委員会によるチャリティ美術展だったが、政治的なイベントにするのではなく、あくまで文化イベントとして成功させよう、という点で、気持ちを一つにすることができた。そしてその試みは、鑑賞者たちにも伝わったと思われる。

・目標金額の達成

クラウドファンディングと、展示会場の寄付金の双方にて、目標金額を上回る支援金を集めることができた。これだけまとまった金額を集めることができたのも、展示という「場」を共有することができたからだろう。



展示の総評 2

・好評だった展示と作品

写真シリーズ「Lands of No-Return」は、ロシアのウクライナ侵攻の直後に見るべき作品へと姿を変えていた。このタイミングで、この作品シリーズを日本で展示した意味は大きい。

・リピーターたち

展示を見に来てくれた人が、友人を誘って二度目の来場をするというケースが多かったことも、この展示の特徴と言える。

・展示作品への反響

来場者と展示ボランティアメンバーとの間で、自然発生的に会話が始まるが多かった。これも、作品と場を共有することによって生まれたものと言える。



展示の総評 3

展覧会の観客や講演会の観衆、多くのボランティアなど、今回のこのイベントにちょっとでも関わった全ての人、今までとは違い、ウクライナの戦争に関するニュースを他人事ではなく、より深く聴く様になったり、調べたりする様になったことでしょう。

一般的に自宅に画集があったりネットで見ることができる作品があれば、展覧会に行く必要がないという気になる時があるが、それは違い、実際のその展示を見に行くことに意味がある。そういう違いがあることをこの今回のイベントは、強く見せてくれた様に思える。関わった人にしか見えない部分だが、文化的イベントを開くこと、参加することの大切さを痛感させられる結果となった。



実行委員会の総評

・全員がボランティア

渡辺真也代表の呼びかけに応じたロシアのウクライナ侵攻への支援を希望する人たちが集まり、実行委員会が誕生した。全員がボランティアで関わったにもかかわらず、メンバーの多くが最後まで高いモチベーションを保って展示実行に関わった。また、展示設営、展示オペレーション、広報、通訳、翻訳、撮影、グラフィックデザイン、ウェブデザインなど、様々な分野で活動する、能力の高いメンバーが多く、タスクを分担しながら、高いクオリティの展示を実現することができた。

・ロシアのウクライナ侵攻から2カ月半後に国際展をオープン

実行委員会のメンバーは、Facebookメッセンジャー、Line、Google Doc、Zoomなどを活用してコミュニケーションを取り合い、展示準備を進めた。結果、ロシアのウクライナ侵攻開始の2ヶ月半後には、東京にてチャリティ美術展をオープンさせ、アーティストを東京に招致することができた。これは快挙と言えるのではないか。

・優秀なバイリンガル人材

今回は実行委員会メンバーの多くがテンプル大学の関係者ということもあり、優秀な日英バイリンガル人材が揃い、日本語が話せないアーティストとのコミュニケーションが取りやすかった。またフランス語を話せる人材が2名いたことも、フランス語話者であるヴィクトリアにとって安心材料となった。

実行委員会の解散

ギャラリーTOMでのチャリティ展の終了、
さらにUNICEFへの寄付の完了に伴い、
この報告会をもって、第二回ART-AID実行
委員会を解散とする。

領 収 書

〒171-0044
豊島区千早
4-36-3
利久マンション202

2022年07月26日
TR 135071

アートエイド実行委員会 ART-AID Exhibition Committee 様

¥1,186,262-

但し ウクライナ緊急基金として

東京都港区高輪 4丁目6番12号 ユニセフウズ
公益財団法人 日本ユニセフ協会

for every child unicef

